

## 福祉と建設に関する教育の取り組みについて(その2)

今川 朱美\*・大東 延幸\*

(平成19年10月31日受理)

### An Approach to Education for Social-Welfare and Construction [2]

Akemi IMAGAWA-SATO and Nobuyuki OHIGASHI

(Received Oct.31,2007)

#### Abstract

This year we gave an education to the seniors at the department of civil engineering, which was discussed from the social welfare point of view. The aim of "Engineering and Social-Welfare" is to have our students understand what the social-welfare is, and promote the social-welfare of engineering science as an expert of construction in the future. Therefore, this course consists of the hands-on learning and the lecture given by a social-welfare expert. The students were strongly impressed and terribly shocked by their counterfeit experience of conducting themselves handicapped and a handicapped person's talk. It is clear from these that they need to know what kind of social-welfare should be given to civil engineering. Needless to say, the social-welfare is not limited to nursing or volunteering. We have to work on universal design as earnestly as possible.

In order to accomplish this task, we need to know "one's strong points and weak points" and have "flexible way of thinking."

**Key Words:** universal design, barrier-free, a viewpoint of the welfare, civil engineering

#### 1. はじめに

「福祉と工学」が開講されるに至った理由は、「福祉と建設に関する教育の取り組みについて(その1)」に述べた。卒業後に社会資本に関わる仕事に就く学生が大半である都市建設工学科では、世の中のニーズに応え「福祉的な視点」を教授する必要があると考える。

本学科において実質的な福祉を教育に取り入れるにあたり、差別と隣り合わせのデリケートな問題であることから、その準備には多くの労を費やした。その過程から、教育への配慮がいかに必要であるかを我々教員も再認識することとなった。これほど多くの時間を費やし、多くの人の協力を得て行う授業は、これまで経験がなかったが、これほど多くの気付きがあった授業も始めてである、というの

が、我々の共通の認識である。

本稿では、そのすべてを記すことは不可能であるが、そのつど、我々が考慮したことを記載する。

#### 2. 「ユニバーサル・デザイン」を理解する

バリアフリーとは、人を隔てたり、行動を妨げたりする障壁(バリア)を取り除いた状態のことで、それを計画に取り入れることが都市基盤整備の中で福祉的配慮として求められていることは、別稿<sup>1)</sup>で述べている。

しかし、数年前より「ユニバーサルデザイン(Universal Design 略称:UD<sup>2)</sup>)」が主流となりつつある。「すべての人のためのデザイン」を意味し、年齢や障害の有無などにかかわらず、最初からできるだけ多くの人利用可能な状態にデザインすることを言う。まさに、社会基盤整備に関わ

\* 広島工業大学工学部都市建設工学科

る者に求められる感性である。

バリアフリーとユニバーサルデザインの違いであるが、バリアフリーは特定ユーザー（多くの場合は障害者）の問題を解決することであり、問題が解消すれば良しとされる。例えば、車いすの利用者にとって歩道への段差は移動を妨げるので、スロープにすれば解決とされる。しかし、目の不自由な方にとって、歩道の段差は車道へ出て行かないための案内であり、点字ブロックがない場合は、白杖で段差に沿って移動をしている。つまり、段差を無くされると、歩道に沿って歩くための手がかりを失うことになる。そこで、ユニバーサル（できるだけすべての人のため）なデザインが必要となる。

### 3. 「福祉と工学」での福祉教育の取り組みのために

ユニバーサルデザインとはどのようなものか説明するために、本学のある地域での事例調査を行った。事例を見せるのであれば、身近にあるものがよいだらうという考えである。残念ながら、本学のある佐伯区内には、紹介できるような事例がなかった。範囲を広げて広島市内ということで調べると、2件<sup>3)</sup>見つかったが、講義へと展開できるようなものではなかった。



図1 広島ユニバーサルデザインのロゴマーク

事例がないのであれば、活動を紹介できればと思い、広島ユニバーサルデザイン協議会<sup>4)</sup>(図1)について調査することにした。全国で数箇所の自治体を中心になって、ユニバーサルデザインを広く知らしめようという活動をしている。広島ユニバーサルデザイン協議会は、広島市企画総務局企画調整部と、国土交通省中国地方整備局・広島国道事務所が共同で事業を展開している。その、双方に資料をご提供いただいたところ、実情としては事務局を務めている状況で、実際の活動は、(財)広島市社会福祉協議会(この後は福祉協議会と呼ぶ)が行っているということであった。

福祉協議会では、バリア(障壁)を真に理解し解消するために、健常者が、擬似的に障害者・高齢者を体験する、擬似的体験装着グッズを使った体験型学習活動を行っている。また、障害のある方を講師として派遣し、障害者の感じるバリアについての講演を行い、障害者の立場に立って物事を感じ考えられる健常者の育成を目指している。主に、中高生の福祉教育の一環として行われることが多い。

都市建設工学科の開講教科である「福祉と工学」は今年度の4年生を対象としている。現在の4年生はゆとり教育がはじまる前の学生であり、ゆとり教育の中で展開された福祉教育を受けた学生は数名であった。したがって、車椅子を見たこともなく、障害を持つ方と話したこともない学生が大多数であった。座学で知識としての福祉を学んだだけでは、卒業後、都市建設に関わる職務において事例を参考にバリアフリーを目指すことはできても、ユニバーサルデザインを行うには、やはり、体験型の学習も必要だと判断した。

### 4. 主役が輝ける都市環境のために

講師としてお招きしたのは、筋ジストロフィーのため電動車椅子ユーザーとなられたの大元氏(図2)である。



図2 車椅子ユーザーの講演

大元氏は、「都市環境は、そこで人生を演じるための舞台だ」と述べられ、

①どんなに優れた技術も、どんなに素晴らしいデザインも、そこで暮らすすべての人が主役として人生を演じられなければ、意味がない。

②都市が……街が変われば、人はもっと活動的になる。

③福祉は介護やボランティアだけじゃない

すべての分野に関わる人が、あらゆる立場の人に配慮する、それこそ福祉だ!

と語られ、その上で、ユニバーサルデザインを実現するために、「より多くの人得て不得手を知る」「柔軟な発想と工夫が必要」として、事例を説明された。

まず、視覚障害の人を見かけたら、なにができるか考えてほしい、車椅子を使用している人がいたら、その人の立場になって考えてほしい、そうすれば、何が柔軟な発想や工夫が生まれてくる、と講義をまとめられた。

講義の後、喫煙所で学生らと一服されたが、そのときに、ご自分ではタバコを楽しむことのできない身体の状態での

らっしゃるため、学生らが戸惑いながらも、火をつけたり、タバコを口にくわえられるようにして差し上げるというシーンが見られた。なにができるか、どうすればよいか、を実践することになった学生らは、戸惑いながらもどうにかしていた。どうしたらいいか分からなければ、尋ねればよいということにも気付いた様子であった。

## 5. 車椅子ユーザーの立場になる

次に講師として来ていただいたのは、車椅子介助の仕事をしている甲田氏であった。車椅子の仕組みや使用上の注意を受けた上で(図2)、学生に車椅子の使用者、介助者に分かれて体験の機会を与えた(図3)。



図2 甲田氏に説明を聞く学生



図3 車椅子で段差を超える

車椅子がいかに不自由で、危険が伴う乗り物であるかを肌で感じ、車椅子介助がいかに重労働であるかを知る機会となった。誰ともなく、「車椅子乗るようになったら、自分も親も大変だ」という声があがった。また、操作のコツをつかみ、ちょっとした工夫で上手に1人で車椅子を扱い、自由に移動できるようになった学生に、「車椅子で自由に活動できるようになった人もいるけど、大抵は介助が必要で、自分1人で行動できないのですよ。」と甲田氏が声かけ

をされた。学生は、すぐさま何かを察知し、車椅子で自由に走りまわるのをやめた。そして、車椅子ユーザーの方が『できないこと』を『できる』ようにしたいという思いも芽生えたらしく、懸命に越えやすい段差を探しはじめた。

肢体不自由者、高齢者、視覚障害者、聴覚障害者の疑似体験も合わせておこなったが、その詳細については別稿<sup>1)</sup>を参照いただきたい。

## 6. むすび

本年度の都市建設工学科にて試みた、福祉的な視点を建設に取り込んだ科目、「福祉と工学」では、福祉とはなにかということ建設に携わる者の立場から専門的な教育を行うと共に、体験型学習も取り入れた。我々教員では、力不足の部分もあるため、社会福祉のエキスパートである方々にご協力を願い、実現した貴重な授業であった。受講生は、印象が強かったらしく、下級生らにも授業での出来事を伝えているらしく、現3年生から、ユニバーサルデザインに取り組みたいという数名の学生が申し出があった。そして、来年は自分たちがその授業を受けたいと希望している。

我々の有意義な授業を展開したいという思いは強く、数名の希望者があるなら、なおさら、来年度も体験型学習を展開するために、準備をする予定である。

さらに、本学と離れたところでも波紋が広がっており、本学園のなぎさ公園小学校にて、音楽の授業で「手話」を使った歌を合唱していると知った。担当教員は、「車椅子を使った授業を大学で行っていることを知り、知識ではなく感性で学ぶべきこともあると思い、手話での合唱を試みた。」と述べられた。

特別なことではなく、日常の中で、ユニバーサルな意識を持つこと。都市建設工学科で学ぶ学生には、そのような感性を持ち、卒業してもらいたいと願う。

## 謝 辞

「福祉と工学」の授業では、(財)広島市社会福祉協議会において、平成19年度「やさしさ発見(福祉活動体験)プログラムモデル事業」の助成いただき、大元誠司氏(広島県社会福祉協議会 広島県ボランティア情報センター) 甲田千代子(特定非営利活動法人 もちもちの木)の両氏を講師としてお招きすることができました。ここに、感謝の意を表します。

## 註

- 1) 文献1)
- 2) ユニバーサルデザインとは、誰にとってもこちいいこと、やさしいこと、であり、その7原則は、

- (1) 誰でも使えて手にいれることが出来る (公平性)
  - (2) 柔軟に使用できる (自由度)
  - (3) 使い方が簡単にわかる (単純性)
  - (4) 使う人に必要な情報が簡単に伝わる (わかりやすさ)
  - (5) 間違えても重大な結果にならない (安全性)
  - (6) 少ない力で効率的に, 楽に使える (省体力)
  - (7) 使うときに適当な広さがある (スペースの確保)
- 3) 広島市「色彩のユニバーサルデザイン・ガイドライン」

平成 17 年 3 月と, シャレオの施設内であるが, 問題も多い。

4) <http://www.city.hiroshima.jp/toshikei/design/ud/>

#### 参 考 文 献

- 1) 大東, 今川「福祉と建設に関する教育の取り組みについて(その1)」平成 19 年度広島工業大学紀要(教育編)(掲載予定)